論文の内容の要旨

論文題目：アカデミック・ライティングにおける協同推敲支援システムの開発と実践に関する研究

氏名：舘野泰一

■概要

本研究では，大学生のアカデミック・ライティングを支援するために，協同推敲支援システムの開発を行い，実践を行った．

最初に，本研究の主要概念であるアカデミック・ライティングと協同推敲の定義について説明する．本研究では，アカデミック・ライティングを「高等教育機関で求められる，自らの主張に対して論証を行う学術的な文章」と定義した．次に，本研究では，協同推敲を「チューターや学生間のやりとりを通して，レポートの本体及びレポートの書き方を改善させるための教育方法」という意味で用いた．協同推敲の中でも，レポート本体の改善を主とするものを「プロダクトに着目した協同推敲」，レポートの書き方（プロセス）の改善を主とするものを「プロセスに着目した協同推敲」と呼ぶ．

本研究で取り扱う問題は，アカデミック・ライティングにおける「協同推敲の質」の改善である．近年，協同推敲は正課課程内・外で導入されているが，協同推敲の質をどのように改善するかについて着目した研究は少ない．そこで，本研究では，「協同推敲の質」を改善するために，ICT を活用したシステムの開発を行い，実践を行った．

本研究は，アカデミック・ライティングを支援する環境として，正課課程内・外における総合的な支援環境の構築を行うことを目的とした．そのため，１．正課課程内における指導の現状と問題点，２．正課課程外における指導の現状と問題点，を整理し，それぞれの活動を支援するためのシステムの開発を行い，実践・評価を行った．

具体的には，1．正課課程内における指導を想定した「プロダクトに着目した協同推敲」，２．正課課程外における指導を想定した「プロセスに着目した協同推敲」，の２つのシステムの開発及び，実践を行った．

本研究は，「協同推敲の質」を改善するために，「可視化」を用いた支援を行った．これまでの協同推敲では，「レポート本体（プロダクト）のみ」を共有してコメントのやりとりを行っていた．しかし，レポート本体だけを共有しても，協同推敲で着目すべき，レポートの論理構造や，レポートを書く過程についてコメントをすることは難しい．そこで

本研究では，レポートの論理構造や，レポートを書く過程を，ICT を活用して「見えるようにすること（可視化）」で，協同推敲の活動を支援した．具体的には，３章「プロダクトに着目した協同推敲」では，論理構造に着目したコメントを行えることの支援を行い，４章「プロセスに着目した協同推敲」では，文章生成過程に着目したコメントを行えることの支援を行った．

開発したシステムを使った実践を行った結果，３章の実践では．学生の「論理構造に着目したコメント」を促すことができた．さらに，４章の実践では，チューターの「文章生成過程に着目したコメント」を促すことができた．以上の結果から，アカデミック・ライティングにおける協同推敲では，可視化を用いた支援が有効であることが明らかになった．ICT を活用した協同推敲を支援するためには，協同推敲中に着目してもらいたい点を明確にし，その部分を「見えるようにすること（可視化）」が有効であることが示唆された．

本研究を行ったことで見えてきた，ICT を活用した協同推敲支援の新たな視点は，「コメントの受け手の支援」である．本研究では，可視化を行うことで，コメントの送り手がよいコメントを行えることを支援していた．しかし，実践のデータを分析すると，コメントの受け手が，もらったコメントを媒介にして「自らの意図や悩みを説明すること」が，自らの文章や書き方の問題点に気づくきっかけとなっている可能性が示唆された．

以上の結果を踏まえ，ICT を活用した協同推敲の指導モデルとして，可視化によってコメントの送り手を支援するだけではなく，そのコメントをもとに受け手が「自らの意図や悩みを説明すること」を含めた支援を行うことの重要性が示唆された．

■各章の概要

第１章では，なぜ大学教育においてアカデミック・ライティングの教育を行う必要があるのかについて考察した．最初に「大学の歴史」「リテラシー研究」という２つの視点からその意義について論じた．次に，大学教育改革について，ユニバーサル化，グローバル化という２つの視点から検討し，最後に初等中等における作文教育との接続について考察した．大学においてアカデミック・ライティングの教育が求められる背景には，大学の役割の変化や，学生の多様化といった問題に加え，初等中等における作文教育との接続という構造的な要因も大きいことがわかった．

第２章では，大学教育においてどのようにアカデミック・ライティングの教育を行うべきかについて論じた．具体的には，１．日本におけるアカデミック・ライティング教育の流れ，２．本研究で対象とするアカデミック・ライティングの課題，３．現在行われている教育方法の特徴と問題点，４．書くことを支援するための学習理論，の４点について述

べた．これまで行われてきたアカデミック・ライティングの指導についてレビューすることで，１．正課課程内における指導を想定した「プロダクトに着目した協同推敲」，２．正課課程外における指導を想定した「プロセスに着目した協同推敲」，という２つの研究を行う必要性について論じた．

第３章では，正課課程内におけるアカデミック・ライティングの教育を想定し「プロダクトに着目した協同推敲」を支援するために，システムを開発し，実践を行った．２章で行ったレビューから「プロダクトに着目した協同推敲」として，特に「論証を意識したコメント」を促すことを目的とした．この活動を支援するために開発したシステムが「カラコメ！」である．開発したシステムの特徴的な機能は，アンカードコメント機能である．この機能では，論証の構成要素となる文章の一部分を直示して，コメントを行うことができる．これにより，論証の構成要素が可視化された状態でコメントを行うことができる．実践は，大学１・２年生 15 名を対象に実施した．実践を行った結果，アンカードコメント機能を使用することで，論証を意識したコメントを促すことができ，レポート改善のきざしが見えた．

第４章では，正課課程外におけるアカデミック・ライティングの教育を想定し「プロセスに着目した協同推敲」を支援するために，システムを開発し，実践を行った．２章で行ったレビューから「プロセスに着目した協同推敲」では，学習者の文章生成過程に着目したコメントを支援することを目的とした．この活動を支援するために「レポレコ」と呼ぶシステムを開発した．レポレコの特徴的な機能は，執筆プロセスの記録・可視化である．学習者の文章生成過程の可視化を行うことで，チューターによる執筆プロセスの理解，指導を支援した．実践は，正課課程外での指導経験のあるチューター12 名と，大学１・２年生 12 名のペアを対象として実施した．実践の結果「レポレコ」を使用することで，チューターは学生の執筆プロセスを理解し，指導につなげていた．さらに，学生は自らの文章生成過程について振り返りを行っていた．

第５章では，３章・４章の知見をもとに，ICT を活用した協同推敲を行う際の指導モデルを導出し，実践のモデルケースの提案を行った．３章・４章の実践の結果から，可視化による支援を行うことで，コメントの送り手を支援することで，協同推敲の質を向上させることができたと考えられる．これにより，ICT を活用した協同推敲において，可視化による支援が有効であることが示唆された．さらに，実践のデータや今後の支援のあり方を検討すると，コメントの送り手だけでなく，「コメントの受け手」の視点も検討することが重要であることが示唆された．具体的には，ICT を活用した協同推敲支援のモデルとして，「送り手のコメントをきっかけに，受け手が自らの意図を説明することを通して自らの問題点について理解を深め，その結果としてレポートや書き方の改善を目指す」ことを想定

することが重要であることが示唆された．５章では，このモデルを採用することで，１．アカデミック・ライティングを支援するための協同推敲支援システムのあり方，２．実践の進め方，３．分析手法，にどのような影響が起こるかについて述べた．また，最後に，実践のモデルケースの提案を行った．実践のモデルケースとして，１．正課課程内・外というマクロな枠組みをもとに統合した実践モデル，２．正課課程内・外にこだわらずシステム及び活動を統合したミクロな実践モデル，の２点を示すことで，今後のアカデミック・ライティングの教育の実践への示唆を行った．